

マタイ 16:3 における *tristis* の古英語訳について

石 原 覚

I

以下は、パリサイ人たちとサドカイ人たちに天からの兆候を見せるよう要求されたイエスの応答を記した、ウルガータ (Vulgata) の福音書一節である。ここには *tristis* (陰鬱な) という語が見出される。

- (1) At ille respondens ait eis facto vespere dicitis serenum erit rubicundum est enim caelum et mane hodie tempestas rutilat enim *triste* caelum faciem ergo caeli diiudicare nostis signa autem temporum non potestis (Mt 16:2-4)¹⁾

(しかし彼は答えて彼らに言った、「夕方になると、あなたたちは言う、『明日は] 晴れるだろう、空が赤いから』。そして朝には、『今日は嵐だ、陰鬱な空が赤く光っているから』。だからあなたたちは、空様様の見分け方を知っているのに、時の兆候は [見分けることが] できない』。)

下の (2) は (1) に対応する古英語訳福音書の箇所である。(1) の *tristis* を表現するのに *unwederlice* (嵐のように) が用いられていることに気付く。

- (2) ... on æfen ge cweðaþ. to-morgen hyt byþ smylte weder þes heofon ys read. & on morgen ge cweþað. to-dæg hyt byþ hreoh weder þeos lyft scinð *unwederlice*. ... (Mt (WSCp) 16.2-3)²⁾

(……夕方には、あなたたちは言う、『明日は晴天だ、空が赤い』。そして朝には、あなたたちは言う、『今日は荒天だ、空が嵐のように光っている』。……)

ちなみに福音書行間注解の対応箇所では、以下の (3)(4) のようにそれぞれ直訳の *unrotlic* (憂鬱な)、*unrotlice* (憂鬱に) が見られる。

- (3) ... & to merne ƿaar to dæg stearm fagas forðon *unrotlic* heofon ... (MtGl (Li) 16.3)
- (4) ... & to-dæge biþ hreanis readaþ forþon *unrotlice* þe heofun ... (MtGl (Ru) 16.3)

(2)に見られる *unwederlice* は、次の (5) におけるごとく「嵐」を意味する語である *unweder* に由来する。

(5) & se clæna hwæte bið gebroht on godes berne þæt is þæt ða rihtwisan beoð gebrohte to þam ecan life: þær ne cymð storm ne nan *unweder* þæt ðam corne derie; (ÆCHom I, 35 480.130)³⁾

(汚れない麦は神の納屋へと運ばれる。すなわち義人たちは永遠の命へと導かれ、そこへは穀物を害する荒天も嵐も来ない。)

本稿では、(2)の *unwederlice* が (1)の *tristis* の意味を反映しているのかわからないのか、またもし反映していないならば、なぜそれが用いられているのかについて考察する。

II

最初に *tristis* という語の持つ基本的な意味のうちいくつかを確認しておこう。この語はまず次の (6)(7) におけるように、憂鬱な人間について用いられる。

(6) *proinde eri ut sint, ipse item sit; uoltum e uoltu comparet: tristis sit, si eri sint tristes; hilarus sit, si gaudeant.* (PLAVT. Amph. 961)⁴⁾

(ですから [奴隷は] 主人たちのように自身もなるべきで、顔つきも合わせ、主人たちが悲しければ悲しくなり、陽気であれば喜ぶべきなのです。)

(7) *meus oculus, mea Selenium, numquam ego te tristiozem uidi esse. quid, cedo, te opsecro, tam abhorret hilaritudo?* (PLAVT. Cist. 53)⁵⁾

(ねえセレンウム、あなたがそんなに悲しんでいるのを見たことがないわ。お願いだから、何で楽しそうにしていなかったのか教えて。)

次に *tristis* は以下の (8)~(11) に見られるように、憂鬱な印象を与える場所や音について用いられる。

(8) *sic animus in hoc tristi et obscuro domicilio clusus, quotiens potest, apertum petit et in rerum naturae contemplatione requiescit.* (SEN. epist. 65, 17)⁶⁾

([緊張で目を疲れさせる、何らかの細かい作業をする職人たちは、もし乏しく心もとない明かりで働くなら、戸外に出て、人々の余暇のために設けられたどこかの区域で、十分な光のもと目を楽しませる。] そのように、この陰気で暗い住居に閉じ込められた魂は、機会がある

たびに、開けた場所を求め、自然界のあれこれを観察して休息を得るのである。)

- (9) *sola tamen, quaecumque aderant in corpore vires, regalis manicas rupit utraque manu. inde Cithaeronis timido pede currit in arces. nox erat, et sparso triste cubile gelu.* (PROP. 3, 15, 26)⁷⁾

(しかし彼女は、体にいかほどの力が残っていようと、一人で、王女がかけた手枷を両手から引きちぎった。それからキタエローンの高地へ脅えた足取りで急ぐ。夜で、霜が散ったねぐらは陰鬱だった。)

- (10) *fons stat sub umbra tristis et nigra piger haeret palude: talis est dirae Stygis deformis unda quae facit caelo fidem.* (SEN. Thy. 665)⁸⁾

(日陰に、陰鬱で澱んだ泉が、黒い沼となって、動かずにある。神々に信じられている恐ろしいステュクスの醜い流れもかくやである。)

- (11) *subnectere plura conantem tristis caeli cum murmure vasto turbavit fragor et subita de nube procellae.* (SIL. 12, 603)⁹⁾

(彼がさらに言おうとすると、空の巨大なごろごろという陰鬱な轟きが、また突然の雲からの嵐が、彼をかき乱した。)

注目すべきは *tristis* が以下の (12)~(21) に見られるごとく、(憂鬱な印象を与える) 暗い色の物について用いられることである。¹⁰⁾(12)~(15) では植物について

- (12) *deterrimum et tantum ad arcendam famem, fecunda sed gracili stipula, nigritia triste, pondere praecipuum.* (PLIN. nat. 18, 141)¹¹⁾

([ライムギは] 非常に劣悪な食物で、飢餓を避けるためだけのものであり、茎は実は多いが細く、陰鬱な黒ずんだ色をしていて、極めて重い。)

- (13) *Similis his etiamnunc aspectu est, ne quid praetereatur, taxus minime virens gracilisque et tristis ac dira, nullo suco, ex omnibus sola bacifera.* (PLIN. nat. 16, 50)¹²⁾

(さらに、省略しなければ、これらに見た目が似ているのがイチイの木であり、ほとんど緑色でなく、ほっそりしていて、陰鬱で恐ろしげで、樹液がなく、すべての中で唯一果実がなる。)

- (14) *sed hoc negatum plerisque; non enim omnes florent, et sunt tristes quaedam quaeque non sentiant gaudia annorum;* (PLIN. nat. 16, 95)¹³⁾

(しかしこれ [花] はかなり多く [の樹木] に拒まれている。すべて

花が咲くわけではなく、**陰鬱**で、季節の喜びを感じられないものもあるからである。)

- (15) *Tristibus interea ramis teneraque cupresso damnatus flammae torus et puerile feretrum textitur*: (STAT. Theb. 6, 54)¹⁴⁾

(その間、**陰鬱**な枝、若い糸杉で、燃やされる定め of 寝床、子供用の棺が編まれる。)

- (16) では**鉱物**について

- (16) *caerulea est circa Thermodontem amnem, in Phrygia purpurea et in Cappadocia ex purpura caerulea, tristis atque non refulgens*. (PLIN. nat. 37, 115)¹⁵⁾

(テルモドーン河の近くでは青色の、プリュギアでは紫色の、カッパドキアでは紫がかった青色で、**陰鬱**かつ輝きのないの [碧玉] がある。)

- (17)~(19) では衣服について

- (17) *aspexit in pomeriis civitatis funus ingens locatum plurimos homines ingenti multitudine, qui exsequias venerant, circumstare, omnis tristissimos et obsoletissimos vestitu*. (APVL. flor. 19)¹⁶⁾

(都市の境界で大きな葬列を目にしたが、**葬儀**に来た非常に多くの人々がそれを取り囲んでおり、彼らはみな**大変陰気**で、**大変みすぼらしい**装いをしていた。)

- (18) *amator ille tristium lacernarum et baeticatus atque leucophaeatus, . . . nativa laudet, habeat et licet semper fuscus colores, galbinos habet mores*. (MART. 1, 96, 4)¹⁷⁾

(**陰気**なマントを愛用し、バエティカ産の羊毛や灰白色の衣服を着るあの人物は、……染めていない物が良いと言い、常に暗い色を身に付けてはいるが、性向は**黄緑色**である [女々しい]。)

- (19) *Lana quidem tristis sed tonsis nata ministris, quales non primo de grege mensa citat*. (MART. 14, 158, 1)¹⁸⁾

([ポツレンティア産の] 羊毛はなるほど**陰気**であるが、髪を刈り込んだ召使たちには相応しい——上等の者たちではなくとも、食卓で必要とされるような。)

- (20)(21) ではそれぞれ**雲**、**影**について

- (20) *apta mihi vis est: vi tristia nubila pello, vi freta concutio nodosaque robora*

verto induroque nives et terras grandine pulso; (OV. met. 6, 690)¹⁹⁾

(私に相応しいのは暴力だ。私は力ずくで陰鬱な雲を追い払い、力ずくで海を震わせ、節くれだった樫の木をひっくり返し、雪を固め、大地を霰でたたくのだ。)

- (21) qui strepitus circa comitum! quantum instar in ipso! sed nox atra caput *tristi* circumvolat umbra. (VERG. Aen. 6, 866)²⁰⁾

(取り巻きが何とぞわめいていることか。自身の姿の何と偉大なことか。しかし暗い夜が陰鬱な影となって、頭の周りにただよっている。) *tristis* は用いられている。なお名詞の *tristitia* には下の (22) におけるように暗い場所について用いられた例が見られる。

- (22) Ubi per saecula conditus tenebris ac *tristitia* loci crevit in vitium, ipsa ingravescit mora, peior quo segnior; (SEN. nat. 6, 28, 2)²¹⁾

([この微風(有害な蒸気)は] 長期間暗闇や陰気な場所に保持されると害をなすものになり、留め置かれることそのものにより悪質化し、停滞すればするほど危険なものになる。)

さらに *tristis* は以下の (23)~(25) におけるごとく、暗く弱い光についても用いられる。

- (23) propterea loca quae aliqua iniquitate naturae ita clausa sunt ut solem accipere non possint illa quoque nubila et *tristi* luce calefiunt et per diem minus quam noctibus rigent. (SEN. nat. 5, 9, 4)²²⁾

([光には恐らく触れて分かるほどの温かさはないが、自らの働きをなし、濃密なものを引き離し薄くする。] それゆえ自然の何らかの不均衡により日光を受けられないほど閉ざされた場所が、曇った陰鬱な光によっても温められ、夜間より日中のほうが凍結しない。)

- (24) sic face *tristem* pallida lucem funde per auras; horrore novo terre populos, inque auxilium, Dictynna, tuum pretiosa sonent aera Corinthi. (SEN. Med. 793)²³⁾

(かくのごとく天に青白い松明で陰鬱な光を送り、人々を新たな恐怖で脅えさせよ。そしてコリントスの高価な青銅が、ディアナよ、あなたの助けとなるよう、響くように。)

- (25) non illi obscurum caput est, non *tristia* membra, sed proprio tamen una micat sub nomine flamma: Arcturum dixere, sinus qua uincola nodant. (GERM. 93)²⁴⁾

(その〔牛飼座の〕頭は不明瞭ではなく、四肢も暗くはないが、一つだけ光が自らの名前を持って輝いており、それはアルクトゥールスと呼ばれ、衣が結び目を作っているところにある。)

III

本節では(1)のギリシャ語原文に目を転じてみよう。問題の *tristis* は次の(26)における *στυγνάζειν* (愕然とする、憂鬱(陰鬱)である(になる))の現在分詞に由来する。

(26) ... ὀψίας γενομένης λέγετε· εὐδία, πυρράζει γὰρ ὁ οὐρανός· καὶ πρωῆ-
σήμερον χειμών, πυρράζει γὰρ στυγνάζων ὁ οὐρανός. ... (Ev.
Matt.16.2-3)²⁵⁾

(……夕方になると、あなたたちは言う、『明日は] 晴れるだろう、空が火のように赤いから』。そして朝には、『今日は嵐だ、陰鬱な空が火のように赤いから』。……)

このギリシャ語は新約聖書ではもう1例次の(27)に現れ、ここでは人間について用いられており、「憂鬱(陰鬱)である(になる)」と「愕然とする」の双方の意味に解釈される。²⁶⁾

(27) ὁ δὲ στυγνάσας ἐπὶ τῷ λόγῳ ἀπήλθεν λυπούμενος· ἦν γὰρ ἔχων κτήματα πολλά. (Ev.*Marc.10.22*)

(すると彼は、その言葉〔自分が持っているものをすべて売り、貧しい者たちに与えよ云々〕で憂鬱になり(に愕然とし)、悲しみつつ立ち去った。多くの財産を持っていたからである。)

「愕然とする」の意味の *στυγνάζειν* は以下の(28)~(30)における *οἰστρον* (愕然とする)の訳語としての例にも見られる。

(28) πάντες οἱ κατοικοῦντες τὰς νήσους ἐστύγνασαν ἐπὶ σέ, καὶ οἱ βασιλεῖς αὐτῶν ἐκοτάσει ἐξέστησαν, καὶ ἐδάκρυσεν τὸ πρόσωπον αὐτῶν. (Lxx *Ez.27.35*)²⁷⁾

(島々の住人は皆お前〔ツロ〕のことで愕然とし、彼らの王たちは大いに度を失い、彼らの顔は涙を流した。)

(29) καὶ πάντες οἱ ἐπιστάμενοί σε ἐν τοῖς ἔθνεσιν στυγνάσουσιν ἐπὶ σέ· ἀπώλεια ἐγένου καὶ οὐχ ὑπάρξεις ἔτι εἰς τὸν αἰῶνα. (Lxx *Ez.28.19*)

(諸民族の中でお前〔ツロの君主〕を知る者は皆お前のことで愕然と

するであらう。お前は破滅したので、永遠にいなくなるであろう。)

- (30) καὶ στυγνάσουσιν ἐπὶ σὲ ἔθνη πολλά, καὶ οἱ βασιλεῖς αὐτῶν ἐκστάσει ἐκοτήσονται ἐν τῷ πέτασθαι τὴν ῥομφαίαν μου ἐπὶ πρόσωπα αὐτῶν, (Lxx Ez.32.10)

(多くの民族がお前 [エジプト王ファラオ] のことで愕然とし、彼らの王たちは、我が剣が彼らの面前を飛ぶので、大いに度を失うであろう。)

また人間について「憂鬱（陰鬱）である（になる）」の意味の *στυγνάζειν* は以下の (31)(32) にも見出される。

- (31) Οὐδεὶς ἀθυμῶν στεφανοῦται οὐδεὶς στυγνάζων τρόπαιον ἴστησι. (Bas. hom.1.1)²⁸⁾

([それゆえ我々は教えられたとおりに心構えをすべきである。迫り来る日々に、塞ぎ込んだ様子で対するのではなく、それらに、聖徒にふさわしく明るく心で対するのだ。] 意気消沈して冠を授けられる者はいない。憂鬱に戦勝記念碑を建てる者はいない。)

- (32) Ἐπικατάρατος ἡ γῆ, ἠκάνθας καὶ τριβόλους ἀνατελεῖ σοι. Στυγνάζειν προσετάχθης, μὴ γὰρ τρυφᾶν. (Bas.hom.1.3)²⁹⁾

(「地は呪われ、茨とあざみをお前のために生えさせるだろう」[創世記3:17-18]。よって奢侈な生活を送るのではなく、憂鬱になることが定められた。)

ここで形容詞 *στυγνός* (憂鬱な、陰鬱な) にも目を向けてみよう。この語は以下の (33)~(41) におけるように憂鬱な人間について用いられる。(33)~(35) では陰気な性格に関連して

- (33) στυγνός μὲν εἰκὼν δῆλος εἶ, βαρὺς δ' ὅταν θυμοῦ περάσῃς. (S.OT673)³⁰⁾

(明らかにあなたは譲る際には気難しく、怒りで限度を越えるときには過酷だ。)

- (34) τοῦτο δ' ἐποίει ἐκ τοῦ χαλεπὸς εἶναι καὶ γὰρ ὄραν στυγνός ἦν καὶ τῆ φωνῆ τραχύς, ἐκόλαζέ τε ἰσχυρῶς, καὶ ὀργῆ ἐνίστε, ὡς καὶ αὐτῶ μεταμέλειν ἔσθ' ὅτε. (X.An.2.6.9)³¹⁾

([クレアルコス] それを厳しくあることによって実現し、実際見ためは陰気で、声は荒々しく、過酷に罰し、それもしばしば怒りに任せであり、後悔することもたびたびであった。)

- (35) καὶ γὰρ τὸ στυγνὸν αὐτοῦ τότε φαιδρὸν ἐν τοῖς ἄλλοις προσώποις ἔφρασαν φαίνεσθαι καὶ τὸ χαλεπὸν ἐρωωμένον πρὸς τοὺς πολεμίους ἐδόκει εἶναι, (X.An.2.6.11)³²⁾

(実際そのような時、彼の陰気さは他の顔の中では明るさに見え、厳しきは敵に対する勇敢さであると思われたそうである。)

- (36)～(39) では一時的な悲しみに関連して

- (36) ὁ δ' ὡς ὄρα σφε, στυγνὸν οἰμώξας ἔσω χωρεῖ πρὸς αὐτὸν κἀνακωκύσας καλεῖ (S.Ant.1226)³³⁾

(彼 [クレオン] は彼 [ハイモン] を目にする、悲しげに呻き、中へと彼に向かって進み、嘆きながら声をかけた。)

- (37) σὺ δ' ἄνδρ' ἔταιρον δεσπότην παρόνθ' ὄρων στυγνῶ προσώπῳ καὶ συνωφρωμένῳ δέχη, θυραίου πήματος σπουδὴν ἔχων. (E.Alc.777)³⁴⁾

(お前は主人の友人を目の前にながら、他人の不幸を案じて、陰気なしかめっ面で彼を迎える。)

- (38) οὐκ ἤρξα, ὅτι σὺ οὐκ ἠθέλησας· οὐδέποτ' ἐπεθύμησα ἀρχῆς. μὴ τί με τούτου ἔνεκα στυγνότερον εἶδες; (Att.Epict.3.5.9)³⁵⁾

(あなたが望まなかったので私は公職に就かなかつたし、公職を求めもしなかつた。あなたは私がつそのため憂鬱なのを見たことがあつたらうか。[私はあなたが命じること、指示することに心構えができて、明るい顔であなたの前に来なかつたらうか。])

- (39) πάντα τοι ὦ βούτα συγκάθανε δῶρα τὰ Μοισᾶν, παρθενικᾶν ἐρόνεντα φιλήματα, χεῖλεα παίδων, καὶ στυγνοὶ περὶ σῶμα τεὸν κλαίουσιν Ἔρωτες, χά Κύπρις ποθέει σε πολὺ πλέον ἢ τὸ φίλημα, τὸ πρῶαν τὸν Ἄδωνιν ἀποθνάσκοντα φίλησεν. (Mosch.3.67)³⁶⁾

(牛飼よ、ムーサのすべての賜物はお前と共に死んだ——少女たちの愛らしい接吻と少年たちの唇は。そして打ち沈んだエロースたちはおまえの体の回りで泣き、キュプリスは、近頃死んだアドーニス以上にお前に接吻を与える。)

- (40)(41) では病的な憂鬱に関連して

- (40) Ὅταν γυνὴ τὴν κεφαλὴν ἀλγέῃ τὸ βρέγμα τε καὶ τὸν τράχηλον καὶ ἰλιγγιᾶ πρὸ τῶν ὀμμάτων καὶ φοβῆται καὶ στυγνῆ ἦ, ... καὶ ἄση ἔχη καὶ δυσθυμίῃ, ... (Hp.Mul.2.182)³⁷⁾

(婦人が頭、前頭部、首に痛みがあり、目の前が眩み、脅えて、憂鬱

であり、……嘔吐感と意気阻喪があるなら、……)

- (41) τεκμήρια μὲν ὧν οὐκ ἄσημα ἢ γὰρ ἡσυχοὶ ἢ στυγνοί, κατηφέες, νωθοὶ ἕασι ἀλόγως, οὐτινι ἐπ' αἰτίη [μελαγχολίης ἀρχή]. (Aret. SD1.5)³⁸⁾

(よって症状は不明瞭ではない。理由もなく、物静かか憂鬱で、意気消沈しており、訳もなく無気力で、それが憂鬱症の始まりである。)

στυγνόςが使われている。なおこの語または名詞の στυγνότης は以下の (42) ~ (49) におけるように、憂鬱な印象を与える事物・場所・状況について用いられる。(42)~(45) では表情について

- (42) ὅταν δ' ἀπευκτὰ πῆματ' ἄγγελος πόλει στυγνῶι προσώπωι πτωσίμου στρατοῦ φέρηι, ... (A.Ag.639)³⁹⁾

(伝令が沈鬱な面持ちで敗退した軍の忌まわしい惨状を都にもたらずとき、……)

- (43) Μάριος δὲ τῷ δίφρῳ παρειστήκει φθεγγόμενος μὲν οὐδέν, ὑποδηλῶν δὲ αἰεὶ τῇ βαρύτητι τοῦ προσώπου καὶ τῇ στυγνότητι τοῦ βλέμματος ὡς εὐθὺς ἐμπλήσων φόνων τὴν πόλιν. (Plu.Mar.43)⁴⁰⁾

(一方マリウスは、その腰掛の傍らに立ち、一言も発しなかったが、常に顔付きの重々しさと目付きの陰惨さで、すぐさま都を殺戮で満たすであろうことを暗示していた。)

- (44) στυγνὸν δ' ὀφρῶν νέφος αὐξάνεται. (E.Hipp.172)⁴¹⁾
(眉根に陰鬱な雲が広がっている。)

- (45) καὶ σύ θ' ἡδίων γενοῦ στυγνήν ὀφρῶν λύσσα καὶ γνώμης ὀδόν, (E.Hipp.290)⁴²⁾

(もっと陽気になって、険しい眉根と気分を楽にしてください。)

(46) では遺体について

- (46) παγχυρόσει κλινητῆρι· ποθεῖ καὶ στυγνὸν Ἄδωνιν. βάλλε δὲ νιν στεφάνοισι καὶ ἄνθεσι. πάντα σὺν αὐτῶι. ὡς τῆνος τέθνακε καὶ ἄνθεα πάντα μαράνθη. (Bion 1.74)⁴³⁾

(陰鬱な姿のアドーンを、すべて黄金でできた寝台に横たえよ。花輪と花を彼に投げよ。すべてが彼と共に。彼が死んだとき、花もすべて枯れた。)

(47)~(49) ではそれぞれ場所、行動、生活状況について

- (47) πῶς δὲ καὶ τίνα τρόπον ἄμα μὲν τὴν στυγνότητα τοῦ συνεδρίου

παρειαγόγουσι θαυμάσιον, ἄμα δὲ τοὺς υἱοὺς ἀπὸ δώδεκ' ἐτῶν ἄγειν
φασὶ τοὺς πατέρας εἰς τὸ συνέδριον, . . . (Plb.3.20.3)⁴⁴⁾

(〔一部の歴史家が〕元老院の重苦しさを驚くほどに描きながら、父親
たちが12歳以上の息子を元老院に連れて行き、……と述べるのはい
かなるわけか。)

- (48) φεύγειν δὲ καὶ τὰ λοιπὰ ἐρεθιστικὰ τῶν ἀφροδισίων, ὡς . . . [μηδὲ τοὺς
περὶ τῆς συνουσίας λόγους τίθεσθαι], στυγνάς δὲ τὰς διαγωγὰς
ποιεῖσθαι καὶ ἀναγνώσεις ὁμοίως καὶ διηγήματα. (Sor.2.46)⁴⁵⁾

(……性交に関する言葉をかけたりするような、他の性的な刺激は避
けるべきであり、地味な娯楽がなされるべきで、読み物や話も同様で
ある。)

- (49) ἔδει θ' ὑπομεῖναι μικροσιτίαν, ῥύπον, ῥίγος, σιωπήν, στυγνότητ',
ἀλουσίαν. (Alex.197)⁴⁶⁾

(〔ピュータゴラスの女弟子は〕小食、汚れ、寒さ、沈黙、陰鬱、不
潔に耐えねばならなかった。)

στυγνόςまたはστυγνότηςが用いられている。

次の(50)(51)においてστυγνόςは、(12)~(22)でtristisないしはtristitia
が暗い色の物について使われていたように、それぞれ夜、暗闇を修飾して
用いられている。

- (50) καὶ πυρὸς μὲν οὐδεμία βία κατίσχυεν φωτίζειν, οὔτε ἄστρον
ἐκλαμπροὶ φλόγες καταυγάζειν ὑπέμενον τὴν στυγνὴν ἐκείνην
νύκτα. (Lxx Wi.17.5)⁴⁷⁾

(火のどんな力も光ることができず、星々の輝く炎もあの陰鬱な夜を
照らすことに耐えなかった。)

- (51) στυγνοῦ σκότους ἔδρασμα, χαρχαρόστομα σκύλαξ, δρακοντέλιξε,
τρικαρανοστρεφή, κευθμωνοδίτα, μόλε, . . . (Suppl.Mag. 42)⁴⁸⁾

(陰鬱な暗闇の座よ、鋸歯の犬よ、とぐるを巻く蛇に覆われ、3つの
頭を回す者よ、冥界を旅する者よ、来たれ。……)

さらに以下の(52)~(56)ではστυγνάζεινまたはστυγνόςが、(23)~(25)
のtristisのように、薄暗い光について用いられている。(52)~(54)では火
明かりについて

- (52) ποτὲ μὲν πλέον ἐκκαίεται καὶ ἄπτεται τὸ πῦρ· ποτὲ δὲ ὡς
μαλθακώτερον καὶ πραότερον, καὶ αὐτὸ τὸ φῶς κατὰ καιροὺς τινὰς

πλέον ἐξάπτεται καὶ λάμπει, ποτὲ δὲ ὑποστέλλεται, καὶ στυγνάζει,
(Mac.Aeg.hom.8.2)⁴⁹⁾

(火は、いっそう燃え立ち燃え上がることもあれば、より弱く静かに燃えることもある。その光は、あるときにはいっそう燃え立ち輝くが、小さくなり暗くなる。[常に燃え、輝いている灯火は、いっそう掻き立てられると、神の愛の酩酊のうちに燃え立つが、次には摂理に従い衰弱し、光はともにあってもよりほの暗くなる。])

- (53) Πάλιν ἔτι ἀπτόμενον τὸ φῶς, ὡσπερ στυγνάζει, καὶ ἐπικείται ὡσπερ ἄηρ τις λεπτός, γνοφώδης, ὡς ἐπὶ δέρματος τῆς ἐναντίας δυνάμεως.
(Marc.Er.temp.27)⁵⁰⁾

([松明がいっそう燃え立ち、輝くと、人はその輝きと明るさに耐えられなくなり、疲れ果てたようになる。] 他方、点じられた光は、言わば暗くなり、敵対する力の獣皮の傍らにあるかのように、言わば薄く暗い空気が迫るのである。)

- (54) ἐλάττονος δὲ καὶ ἦττον λεπτῆς ὑπαρχούσης ὑπόπυρός πως λιγνὺς γίνεται καὶ οἰονεὶ πυρός εἰσπεσόντος εἰς ὕδωρ στυγνὸν σέλας ἐκπέμπουσα. (Adam.Vent.34)⁵¹⁾

([蒸気が] より小さいが、よりか細くはない場合、下に火のある煙が生じ、火が水の中に落ちたときのように、暗い光を発する。)

- (55)(56) では異常な太陽について

- (55) Οὐκ ἂν γάρ, ἀνθρώπου πάσχοντος, ἐστύναζεν ἥλιος· οὐδὲ διὰ φθαρτὸν ἐσχίζετο τοῦ ναοῦ τὸ καταπέτασμα· (Bas.inc.58)⁵²⁾

(人が苦しんで太陽が暗くなったことはなく、また腐敗すべき者のために神殿の垂れ幕が裂けたこともないからである。)

- (56) ὁ γὰρ ἥλιος ἀκτίνων χωρὶς τὴν αἰγλην ὡσπερ ἡ σελήνη ἐστύναζεν ἅπαντα τὸν ἐνιαυτὸν· ἐπὶ πλεῖστον δὲ ἐκλείποντι ἐώκει, οὐ καθαρῶς φαίνων, ὡσπερ εἰώθει. (Thphn.chron.p.171)⁵³⁾

(光線のない太陽は、丸1年間、光が月のように暗くなった。以前のごとく十分には輝かず、蝕になった太陽に良く似ていた。)

στυγνάζειν または στυγνός が用いられている。

ここで重要なのは、στυγνότης, στυγνός および στυγνάζειν に、以下の (57) ~ (59) のごとく、陰鬱な曇り空について用いられている例が見出される事実である。

- (57) θεωροῦντες δὲ τὴν τῶν ἡθῶν ἀυστηρίαν, ἥτις αὐτοῖς παρέπεται διὰ τὴν τοῦ περιέχοντος ψυχρότητα καὶ στυγνότητα τὴν κατὰ τὸ πλεῖστον ἐν τοῖς τόποις ὑπάρχουσαν, (Plb.4.21.1)⁵⁴⁾
〔昔の人たちは〕気風の厳しさに目を留めたが、それはその地方に大抵見られる環境の寒冷さと陰鬱さにより彼らに付与されているものである。〕
- (58) ὑφίσταται δὲ τὴν Ἥραν, τουτέστι τὸν ἀέρα, στυγνὸν ἀπὸ τοῦ χειμῶνος ἔτι καὶ κατηφῆ. διὰ τοῦτο οἶμαι πιθανῶς αὐτῇ στυγερός ἔπλετο θυμός. (Heraclit.All.39)⁵⁵⁾
〔ゼウスは〕またヘーラーを、すなわち冬のあとのいまだ陰鬱で薄暗い空を表す。それゆえ彼女の「心は不快であった」〔イーリアス 14.158〕のは納得がいくと私は思う。〕
- (59) Ἐὰν ὁ οὐρανὸς ὄλος ἐρυθρὸς γένηται ὥσπερ αἷ(μα), ἀνχμὸς γενήσεται τῇ γῆ καὶ ἐν τῷ δευτέρῳ καὶ (τρίτῳ) οἱ καρποὶ ἀπολοῦνται. εἰ ὀψὲ πυρῶ(δης) ὁ οὐρανός, εὐδία ἐσται, εἰ δὲ ὀψὲ στυγνάσει, χει(μῶν)... (Cat. cod. astr. XI 2 p. 179, 19)⁵⁶⁾
〔もし全天が血のように赤くなれば、日照りが地上に起こり、二度三度となると、作物が減びるであろう。夕方空が火のようだと言われ、夕方陰鬱だと嵐になるであろう。……〕
したがって問題の(26)のστυγνάζεινは、(57)~(59)におけると同様、曇り空について「陰鬱な」の意味で用いられていると考えられる。⁵⁷⁾

IV

では(26)のστυγνάζεινの訳語である(1)のtristisはいかなる意味で用いられているのであろうか。この最も重要な問題を考える際手掛かりになるのは、tristisとtristitiaに、(1)におけると同じくcaelum(空)とともに用いられている例が存在するという事実である。以下の(60)~(62)がその例である。

- (60) Bruma lentas pluvias habet et tenues, quales saepe solent intervenire, cum pluvia rara et minuta nivem quoque admixtam habet; dicimus nivalem diem, cum altum frigus et *triste* caelum est. (SEN. nat. 4, 4, 3)⁵⁸⁾
〔冬には持続的で細かい雨が降るが、そうした雨はしばしば、疎らで

小粒の雨が雪と混じるときに生じるものである。寒さが強く空が陰鬱なとき、我々はそれを雪模様の日と呼ぶ。)

- (61) *Perpetua illos hiemps, triste caelum premit, maligne solum sterile sustentat; imbrem culmo aut fronde defendunt, super durata glacie stagna persultant, in alimentum feras captant.* (SEN. dial. 1, 4, 14)⁵⁹⁾

(永遠の冬、陰鬱な空が彼ら [ゲルマーニア族] を苦しめ、不毛な土地が与える作物は不十分である。藁か葉で雨を防ぎ、氷で固くなった沼沢地を歩き回り、野獣を捕らえて食糧にする。)

- (62) *hic vices temporum annumque semper renascentem ex usu naturae temperat, hic caeli tristitiam discutit atque etiam humani nubila animi serenat,* (PLIN. nat. 2, 13)⁶⁰⁾

(それ [太陽] は季節の移り変わりとは絶えず再生する年を、自然に都合の良いように制御する。それは空の陰鬱さを追い払い、更には人間の心の雲を晴れやかにする。)

これらにおいて *tristis* と *tristitia* は陰鬱な曇り空について用いられており、よって (1) の *tristis* も曇り空について「陰鬱な」の意味で——(26) の *στυγνάζειν* の意味を反映させるものとして——とらえるべきであると結論できる。⁶¹⁾

なお Hieronymus (347/348–420)⁶²⁾ と Augustinus (430 没) がマタイ 16:3 について記している中で、Hieronymus は以下のように、予想されるものを雨天としている。

*Hoc in plerisque codicibus non habetur, sensusque manifestus est quod ex elementorum ordine atque constantia possint et sereni et pluuiiae dies praenosci; scribae autem et Pharisei, qui uidebantur legis esse doctores, ex prophetarum uaticinio non potuerunt intellegere Saluatoris aduentum.*⁶³⁾

(これ [マタイ 16:1–4] は大多数の写本に含まれているわけではないが、意味は明らかである。すなわち、諸元素の秩序と一貫性から、晴天と雨天が予想され得るということである。しかし律法学者たちとパリサイ人たちは、律法教師と見なされながら、預言者たちの預言から救い主の来臨を悟れなかった。)

また Augustinus は次のごとく、雲が人を憂鬱にさせると述べている。

Dicimus plerumque: Laetus dies, quando serenus est; numquid ipse dies gaudet? Sed gaudentem dicimus, quia gaudentes nos facit. Et dicimus: Triste

caelum. Non enim est ullus talis sensus in nubibus; sed quia homines huiusmodi uidentes caeli faciem contristantur, triste dicitur, eo quod tristes facit.⁶⁴⁾

(晴朗だと我々はよく「陽気な日」と言う。日そのものが喜ぶのか。そうではなく、我々を喜ばせるから「喜ばしい」と我々は言うのである。また我々は「陰鬱な空」と言う。それは雲にそのような感情があるからではなく、人々がこうした空模様を見て陰鬱になるからであり、陰鬱にさせるから「陰鬱な」と言われるのである。)

つまり両者ともマタイ 16:3 の *triste caelum* を曇天と見なしているのであり、これは先に示した (1) の *tristis* が曇り空について「陰鬱な」の意味で用いられているという結論に即したものである。

以上から (1) の *tristis* が持つ「陰鬱な」という曇天に関する意味は、(2) の *unwederlice* の「嵐のような」という意味には反映されていないことが明らかとなった。

V

なお *tristis* と *tristitia* は以下の (63)~(67) に見られるごとく、自然の及ぼす苛酷な影響についても用いられる。⁶⁵⁾(63)(64) では冬、(65) では固い土壤、(66) では炎、(67) では嵐との関連で *tristis* ないしは *tristitia* が使われている。

(63) *Tristem hiemem, sive ex intemperie caeli raptim mutatione in contrarium facta sive alia qua de causa, gravis pestilensque omnibus animalibus aestas exceptit.* (Liv. 5, 13, 4)⁶⁶⁾

(陰鬱な冬に続いて、急に反対に変化するような天候の極端さによるのか、他の理由によるのか、すべての生き物に深刻で致命的な影響を及ぼす夏が来た。)

(64) *Quin alterius calore alantur corpora, terrae relaxentur, immodici umores comprimantur, adligantis omnia hiemis tristitia frangatur, alterius tepore efficaci et penetrabili regatur maturitas frugum?* (SEN. benef. 4, 23, 1)⁶⁷⁾

(一方 [太陽] の熱により体が養育され、地が開かれ、過度の湿気が抑えられ、すべてを縛り付ける冬の厳しさが砕かれ、もう一方 [月] の効果的で良く通る暖かさにより作物の実りが支配されるということに [疑問があろうか]。)

- (65) *sarculatio induratum hiberno rigore soli tristitiam laxat temporibus vernis novosque soles admittit.* (PLIN. nat. 18, 184)⁶⁸⁾

(春季に鋤で掘ると、冬の凍結による土壤のひどい固さを緩め、春の日光を入れることになる。)

- (66) *tam magis illa fremens et tristibus effera flammis quam magis effuso crudescunt sanguine pugnae.* (VERG. Aen. 7, 787)⁶⁹⁾

(それ [キマエウ] はますます唸り、激しい炎を吐いて逆上する。血がますます流れ、戦いが烈しくなればなるほど。)

- (67) *dispersa rate tristibus procellis mersus fluctibus obrutusque ponto ad votum Diodorus enatavit.* (MART. 9, 40, 6)⁷⁰⁾

(激しい嵐で船は壊れ、波間に沈み、海原に飲み込まれたが、ディオドーロスは妻の祈願どおりに泳いで助かった。)

注目に値するのは、このように用いられた *tristis* の中には、以下の (68)~(70) におけるように「嵐の、荒れた」の意味でとらえられるものがあるということである。(68)(69) では海について、(70) では波について *tristis* は用いられている。

- (68) *Invideo Phrixo, quem per freta tristia tutum aurea lanigero vellere vexit ovis; nec tamen officium pecoris navisve requiro, dummodo, quas findam corpore, dentur aquae.* (Ov. epist. 17, 143)⁷¹⁾

(私は金毛の羊が荒れた海を無事に運んだプリクソスを羨む。しかし私は家畜や船の助けを求めない。私が体で切り裂ける水が与えられるならば。)

- (69) *Fragmentum quod vile putas et inutile lignum, haec fuit ignoti prima carina maris. quam nec Cyanaeae quondam potuere ruinae frangere nec Scythici tristior ira freti, saecula vicerunt.* (MART. 7, 19, 4)⁷²⁾

(安価で役に立たない木の断片と思われる物、これは未知の海への最初の竜骨であった。それはかつてキューア-ネアエの岩礁も、スキュティアの海の更に荒々しい怒りも砕くことができなかったが、歳月が打ち負かした。)

- (70) *et genus humanum frustra plerumque probavit volvere curarum tristis in pectore fluctus.* (LVCR. 6, 34)⁷³⁾

(また [エピクローソス] は) 人間は、大概根拠もなく、不安の荒々しい波を胸中に押し流すことを明らかにした。)

ここで想起すべきは、(1)の *triste caelum* が嵐の予兆と見なされていることである。この点に関連して *Augustinus* と *Paschasius Radbertus* (9世紀) は解釈を記している。*Augustinus* は以下のとおり、マタイ 16:2-3 に述べられた、晴れの予兆としての夕焼けと嵐の予兆としての曇った朝焼けを、それぞれ主の第一の来臨と第二のその予兆としてとらえ、嵐を「彼の来るべき来臨に先立つ苦難」(*tribulatio ante aduentum suum futurum*) の象徴とみなす。

*Quod dixit dominus: Facto uespere dicitis: Serenum erit, rubicundum est enim caelum, id est sanguine passionis Christi in primo aduentu indulgentia peccatorum datur, et mane: Hodie tempestas, rubet enim cum tristitia caelum, id est quod secundo aduentu igne praecedente uenturus est. Faciem ergo caeli iudicare nostis, signa autem temporum non potestis? Signa temporum dixit de aduentu suo uel passione, cui simile est roseum caelum uespere, et item de tribulatione ante aduentum suum futurum, cui simile est mane roseum cum tristitia caelum.*⁷⁴⁾

(主は言った、「夕方になると、あなたたちは言う、『明日は] 晴れるだろう、空が赤いから』、すなわち第一の来臨においてキリストの受難の血により罪の赦しが与えられる。「そして朝には、『今日は嵐だ、空が陰鬱に赤いから』」、すなわち第二の来臨においては火が先立ち、それから彼が来るであろう。「ならばあなたたちは、空模様の見分け方を知っているのに、時の徴候は[見分けることが] できないのか」。時の徴候とは、自身の来臨あるいは受難について言ったのであり、夕方の薔薇色の空はその譬えである。また同様に自身の来るべき来臨に先立つ苦難についてであり、朝の陰鬱に薔薇色の空はその譬えである。)

Paschasius Radbertus (9世紀) は以下のごとく *Augustinus* の解釈を踏襲し、さらに *validus* (強い) を加えて嵐を強調する。

Et mira comparatio. Quia facto uespere sanguine passionis Christi in primo aduentu peccatorum indulgentia datur. Et mane: Hodie tempestas ualida secundi aduentus. Rutilat enim triste caelum. . . .

*. . . neque rursus de tribulatione ante aduentum suum futurum diligentius cogitare cui simile est mane roseum ac triste caelum ex quo et quando tempestas futura praedicatur.*⁷⁵⁾

(驚くべき比較である。すなわち、夕方になると、第一の来臨におけるキリストの血とともに、罪の赦しが与えられる。そして朝には、今日は第二の来臨の強い嵐だ。陰鬱な空が赤く光っているから。……

……また、来るべき彼の来臨に先立つ苦難について——来るべき嵐がそこからまたそのとき予告される朝の薔薇色で陰鬱な空がその譬えであるが——、より慎重に考えることも [できず、またその気もなかったであろう]。)

さらに、「曇り空」を表すには、以下の (71)~(73) におけるごとく、*nubilus* (曇った) を *caelum* (空) とともに用いた *caelum nubilum* という表現が存在する。

- (71) *nam si placidum mare ex aspero caelumque ex nubilo serenum hilari aspectu sentitur, si bellum pace mutatum plurimum gaudii adfert, . . . (VAL. MAX. 4, 2 praef.)*⁷⁶⁾

(もし穏やかになった荒れた海や、澄み渡った曇り空が、明るい気分で見られ、もし平和に変わった戦争が最大の喜びをもたらすなら、……)

- (72) *Nam sereno quoque aliquando caelo tonat ex eadem causa qua nubilo, aere inter se colliso, (SEN. nat. 1, 1, 15)*⁷⁷⁾

(確かに、空気が互いに衝突するために、時に晴れた空においても、曇り空におけるのと同じ理由で、雷が鳴る。)

- (73) *pirus et amygdala, etiam si non pluat sed fiat austrinum caelum aut nubilum, amittunt florem, et primos fructus si cum defloruere tales dies fuerint. (PLIN. nat. 16, 109)*⁷⁸⁾

(梨の木やアーモンドの木は、雨が降らなくとも南風が吹いたり曇り空だったりすれば、花を落とし、落花したあとそのような日々だったりすると、最初の果実を落とす。)

以上3点——*tristis* には「嵐のような、荒れた」の意味でとらえられる例があること、(1) の *triste caelum* が嵐の先触れであること、「曇り空」を表す表現が別にあること——から、(1) の *triste caelum* は「嵐のような (荒れた) 空」の意味でとらえられた可能性があるとわかる。

結論として、マタイ 16:3 の *tristis* を訳した Mt (WSCP) 16.3 の *unwederlice* は、*tristis* がこの箇所 で用いられている意味である「陰鬱な」の意味ではなく、この語が持つ「嵐のような、荒れた」の意味を反映したものである

と言える。

注

- 1) R. Weber et al., *Biblia Sacra iuxta vulgatam versionem*, ed. quinta (Stuttgart, 2007). 古英語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、*The Dictionary of Old English: A-H on CD-ROM* (Toronto, 2017) に従い、ラテン語のテキストのそれは、原則として、同辞典または *Thesaurus Linguae Latinae* (Leipzig, 1900-) に従う。古英語および頭に番号を付したラテン語の引用文中のイタリック体、ギリシャ語の引用文中の下線は、すべて筆者によるものである。なお、原文に付せられた注番号・注文字・注記号は省略した。
- 2) W. W. Skeat, *The Gospel according to Saint Matthew in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged, . . .* (Cambridge, 1887; Nachdr. Darmstadt, 1970). (2) は BT (J. Bosworth and T. N. Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary* (Oxford, 1898)), s.v. *unwederlice* では「悪天候の兆候を示すように、荒れ模様」(‘*In a way that indicates bad weather, threateningly*’) という文脈に即した語義のもとに挙げられている。その一方で R. M. Liuzza, *The Old English Version of the Gospels*, vol. 2, Notes and Glossary, EETS 314 (Oxford, 2000) の Glossary, s.v. *unwederlice* には「嵐のように」(‘*tempestuously*’) とある。
- 3) P. Clemons, *Ælfric’s Catholic Homilies: The First Series, Text*, EETS s.s. 17 (Oxford, 1997). (5) は BT, s.v. *unweder* の「悪天候、嵐」(‘*Bad weather, tempest*’) の語義のもとに挙げられている例である。
- 4) *Plautus: Amphitryon, . . .* ed. and trans. by W. de Melo, LCL (Loeb Classical Library) 60 (Cambridge, MA, 2011), p. 108. (6) は *OLD* (P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, 2nd ed., 2 vols. (Oxford, 2012)), s.v. *tristis* 1 の「元気のない、憂鬱な、不幸な」(‘*Depressed, gloomy, unhappy*’) に挙げられている例である。
- 5) *Plautus: . . . The Casket, . . .* ed. and trans. by W. de Melo, LCL 61 (Cambridge, MA, 2011), p. 140. (7) は *OLD*, s.v. *tristis* 1b において「(外見や表情から明らかであるように)」(‘*as evidenced in outward appearance, expression, etc.*’) 「憂鬱な」の意味の例として挙げられている。
- 6) *Seneca: Epistles 1–65*, with an English trans. by R. M. Gummere, LCL 75 (Cambridge, MA, 1917), p. 454. (8)~(10) は *OLD*, s.v. *tristis* 6 の「憂鬱さ、不幸などを示す特徴や外見について、厳しい、陰気な」(‘*Of a character or aspect conveying gloom, unhappiness, etc., grim, dismal*’) に挙げられている例である。
- 7) *Propertius: Elegies*, ed. and trans. by G. P. Goold, LCL 18, rev. ed. (Cambridge, MA, 1999), p. 276.
- 8) *Seneca: . . . Thyestes, . . .* ed. and trans. by J. G. Fitch, LCL 78 (Cambridge, MA,

- 2004), p. 286.
- 9) *Silius Italicus: Punica*, with an English trans. by J. D. Duff, vol. 2, LCL 278 (Cambridge, MA, 1934), p. 190.
 - 10) *OLD*, s.v. *tristis* 6b には「(陰、暗い色の物などについて) 陰鬱な; (また、光について)」(‘of shade, dark-coloured things, etc.) gloomy, sombre; (also, of light’) の語義が挙げられている。
 - 11) *Pliny: Natural History, Books 17–19*, with an English trans. by H. Rackham, LCL 371 (Cambridge, MA, 1950), p. 278. (12)(13)(15)~(21) は *OLD*, s.v. *tristis* 6b に挙げられている例である。
 - 12) *Pliny: Natural History, Books XII–XVI*, with an English trans. by H. Rackham, LCL 370, rev. and repr. (Cambridge, MA, 1968), p. 420.
 - 13) *Pliny*, LCL 370, p. 448. (14) は C. T. Lewis and C. Short, *A Latin Dictionary* (Oxford, 1879), s.v. *tristis* I.B.1 の「(不幸と結び付いていたり悲しみを連想させたりする物について) 憂鬱な、悲しくさせる、悲惨な」(‘Of things associated with misfortune or suggestive of sadness, melancholy, saddening, unhappy’) において樹木 (arbores) について「陰鬱な」(‘gloomy, sombre’) の意味で用いられた例として挙げられている。
 - 14) *Statius: Thebaid, Books 1–7*, ed. and trans. by D. R. S. Bailey, LCL 207 (Cambridge, MA, 2003), p. 330.
 - 15) *Pliny: Natural History, Books 36–37*, with an English trans. by D. E. Eichholz, LCL 419 (Cambridge, MA, 1962), p. 258.
 - 16) *Apuleius: . . . Florida, . . .* ed. and trans. by C. P. Jones, LCL 534 (Cambridge, MA, 2017), p. 322.
 - 17) *Martial: Epigrams*, ed. and trans. by D. R. S. Bailey, vol. 1, LCL 94 (Cambridge, MA, 1993), p. 112.
 - 18) *Martial: Epigrams*, ed. and trans. by D. R. S. Bailey, vol. 3, LCL 480 (Cambridge, MA, 1993), p. 296.
 - 19) *Ovid: Metamorphoses, Books I–VIII*, with an English trans. by F. J. Miller, rev. by G. P. Goold, LCL 42, 3rd ed. (Cambridge, MA, 1977), p. 336.
 - 20) *Virgil: . . . Aeneid I–VI*, with an English trans. by H. R. Fairclough, rev. by G. P. Goold, LCL 63 (Cambridge, MA, 1999), p. 594.
 - 21) *Seneca: Naturales Quaestiones, Books IV–VII*, with an English trans. by T. H. Corcoran, LCL 457 (Cambridge, MA, 1972), p. 206. (22) は *OLD*, s.v. *tristitia* 4 の「陰気な外観、陰鬱」(‘Dismal appearance, gloom’) に挙げられている例である。
 - 22) *Seneca*, LCL 457, p. 88. (23)~(25) は *OLD*, s.v. *tristis* 6b に挙げられている例である。
 - 23) *Seneca: . . . Medea, . . .* ed. and trans. by J. G. Fitch, LCL 62, rev. (Cambridge,

- MA, 2018), p. 384.
- 24) D. B. Gain, *The Aratus Ascribed to Germanicus Caesar* (London, 1976), p. 24.
- 25) Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, 28. revidierte Aufl. (Stuttgart, 2015).
ギリシャ語のテキストの略記と引用の仕方は、原則として、LSJ (H. G. Liddell and R. Scott, *A Greek-English Lexicon*, rev. by H. S. Jones, with a revised supplement (Oxford, 1996)) または G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon* (Oxford, 1961) による。
- 26) (27) は W. Bauer, *Griechisch-deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der frühchristlichen Literatur*, 6. Aufl. hrsg. v. K. Aland u. B. Aland (Berlin, 1988), s.v. στῦνάζω 1 の「愕然とする」(‘**sich entsetzen**’) の例に挙げられ、さらに στῦνάζω 2 の「陰鬱である、陰鬱になる」(‘**trübe sein, trübe werden**’) において a の「暗然とした、陰気な、ないしは悲しんでいる様子の人について」(‘v. e. Menschen, der betrübt, finster od. traurig aussieht’) の例としても挙げられている。
- 27) A. Rahlfs, *Septuaginta*, ed. altera (Stuttgart, 2006). (28)~(30) は LEH (J. Lust, E. Eynikel, and K. Hauspie, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, rev. ed. (Stuttgart, 2003)), s.v. στῦνάζω において、ἐν と与格を伴う「ある人・物にぞつとする、ある人・物に愕然とする」(‘to be horrified by sb or sth, to be appalled at sb or sth [ἐπί τινα]’) の語義の例として挙げられている。
- 28) J.-P. Migne, *S. P. N. Basilii, Casareae Cappadociae Archiepiscopi, Opera Omnia Quae Exstant*, . . . PG (Patrologia Graeca) 31 (Parisiis, 1885), 164B. (31) は Lampe, s.v. στῦνάζω 1 の「憂鬱な様子である、しかめ面をしている」(‘look gloomy, wear a frown’) に挙げられている例である。
- 29) *Basilii*, PG 31, 168A. (32) は Lampe, s.v. στῦνάζω 2 の「深刻な、ないしは悲しげな様子である」(‘look grave or sad’) に挙げられている例である。
- 30) *Sophocles: . . . Oedipus Tyrannus*, ed. and trans. by H. Lloyd-Jones, LCL 20, repr. with corrections (Cambridge, MA, 1997), p. 392. (33)~(41) は LSJ, s.v. στῦνός II の「陰鬱な、不機嫌な」(‘gloomy, sullen’) に挙げられている例である。
- 31) *Xenophon: Anabasis*, with an English trans. by C. L. Brownson, rev. by J. Dillery, LCL 90, repr. with corrections (Cambridge, MA, 2001), p. 204.
- 32) *Xenophon*, LCL 90, p. 206.
- 33) *Sophocles: Antigone*, . . . ed. and trans. by H. Lloyd-Jones, LCL 21, repr. with corrections (Cambridge, MA, 1998), p. 114.
- 34) *Euripides: . . . Alcestis*, . . . ed. and trans. by D. Kovacs, LCL 12, repr. with changes and corrections (Cambridge, MA, 2001), p. 232.
- 35) H. Schenkl, *Epicteti Dissertationes ab Arriano Digestae* . . . ed. major (Lipsiae, 1916), p. 249.

- 36) U. de Wilamowitz-Moellendorff, *Bucolici Graeci*, ed. altera correctior (Oxonii, 1910), p. 93.
- 37) É. Littré, *Oeuvres complètes d'Hippocrate*, t. 8 (Paris, 1853), p. 364.
- 38) C. Hude, *Aretaeus*, ed. altera (Berolini, 1958), p. 40.
- 39) D. Page, *Aeschyli Septem Quae Supersunt Tragoediae* (Oxonii, 1972), p. 161.
(42)(44)~(46)(48) は LSJ, s.v. *στυγνός* II に挙げられている例である。
- 40) *Plutarch: Lives, . . . Pyrrhus and Caius Marius*, with an English trans. by B. Perrin, LCL 101 (Cambridge, MA, 1920), p. 584. (43)(47)(49) は LSJ, s.v. *στυγνότης* の「陰鬱なこと、不機嫌なこと」(‘*gloominess, sullenness*’) の語義のもとに挙げられている例である。
- 41) *Euripides: . . . Hippolytus, . . .* ed. and trans. by D. Kovacs, LCL 484, repr. with revisions and corrections (Cambridge, MA, 2005), p. 140.
- 42) *Euripides*, LCL 484, p. 150.
- 43) De Wilamowitz-Moellendorff, p. 124.
- 44) *Polybius: The Histories, Books 3–4*, trans. by W. R. Paton, rev. by F. W. Walbank and C. Habicht, LCL 137 (Cambridge, MA, 2010), p. 54.
- 45) I. Ilberg, *Sorani Gynaeciorum Libri IV . . .* (Lipsiae, 1927), p. 125.
- 46) T. Kock, *Comicorum Atticorum Fragmenta*, vol. 2, pars 1 (Lipsiae, 1884), p. 370.
- 47) (50) は LEH, s.v. *στυγνός* において「(夜について)陰鬱な、恐ろしい」(‘*gloomy, horrible (of night)*’) の語義とともに挙げられている。この「恐ろしい」の意味については、(50) に対応するラテン語訳 Sap 17:5 の *horrendus* — *et ignis quidem nulla vis poterat illis lumen praebere nec siderum limpidae flammae inluminare poterant illam noctem horrendam* (火のどんな力も彼らに光を与えることはできず、星々の澄んだ炎もあの恐ろしい夜を照らすことはできなかった) — が想起される。
- 48) R. W. Daniel and F. Maltomini, *Supplementum Magicum*, Papyrologica Coloniensia 16, 1 (Opladen, 1990), p. 133. (51) は J. H. Moulton and G. Milligan, *The Vocabulary of the Greek Testament Illustrated from the Papyri and Other Non-literary Sources* (1930; repr. Grand Rapids, Michigan, 1982), s.v. *στυγνάζω* において、形容詞 *στυγνός* の例示にあるものである。
- 49) J.-P. Migne, *Macarii Aegyptii, Macarii Alexandrini, Opera Quae Supersunt Omnia*, PG 34 (1860), 529A. (52)(53)(55)(56) は Lampe, s.v. *στυγνάζω* 3 の「陰鬱になる、暗い」(‘*grow gloomy, be overcast*’) に挙げられている例である。
- 50) J.-P. Migne, *S. P. N. Procli Archiepiscopi Constantinopolitani Opera Omnia. Accedunt . . . S. Marci Eremitae, . . .* PG 65 (1864), 1069A.
- 51) V. Rose, *Anecdota Graeca et Graecolatina*, 1. Heft (Berlin, 1864). (54) は LSJ, s.v. *στυγνός* II に挙げられている例である。

- 52) D. Amand, 'Une homélie grecque inédite antinestorienne du ve siècle sur l'Incarnation du Seigneur', *Revue Bénédictine* 58 (1948): 247.
- 53) C. de Boor, *Theophrastus Chronographia*, vol. 1 (Lipsiae, 1883), p. 202.
- 54) *Polybius*, LCL 137, p. 384. (57) は LSJ, s.v. στυγνότης に「空について」('of the sky') として挙げられている。
- 55) F. Oelmann, *Heracliti Quaestiones Homericæ* (Lipsiae, 1910), p. 56. (58) は Bauer, s.v. στυγνάζω 2.b の「空模様について」('v. Aussehen des Himmels') に στυγνός の例として挙げられている。
- 56) C. O. Zuretti, *Codices Hispanienses*, Catalogus Codicum Astrologorum Graecorum 11, 2 (Bruxellis, 1934). (59) は Bauer, s.v. στυγνάζω 2.b においてマタイ 16:3 に基づく例として挙げられている。
- 57) (26) は LSJ, s.v. στυγνάζω の「陰鬱な、険悪な様子である」('to have a gloomy, lowering look') の語義のもと「荒れ模様の天候について」('of threatening weather') として挙げられている。また J. F. Schleusner, *Novus Thesaurus Philologico-Criticus: sive, Lexicon in LXX*, ed. altera, 3 vol. (Glasgae, 1822), s.v. στυγνός では「混乱した、よって、恐ろしい、憂鬱な」('perturbatus, perplexus, it. horrendus, tristis') の語義のもと「ソロモンの知恵 17:5 の τὴν στυγνὴν ἐκείνην νύκτα あの『恐ろしい』ないしはむしろ『暗い漆黒の』夜。同じ意味でマタイ 16:3 の στυγνάζω が捉えられるが、ここでは στυγνάζων ὁ οὐρανός が τῆ εὐδία 『空の晴朗さ』と対比されている。ポリュビオス 4.21 参照。ここでも στυγνότης が『空の陰鬱さ』について用いられている」('Sap. XVII. 5. τὴν στυγνὴν ἐκείνην νύκτα, horrendam illam noctem s. potius tenebricosam et atram. Eodem sensu στυγνάζω sumitur Matth. XVI. 3. ubi στυγνάζων ὁ οὐρανός opponitur τῆ εὐδία, cæli serenitati. Confer Polyb. IV. 21. ubi quoque στυγνότης de cæli tristitia dicitur' (vol. 3, p. 124f-g)) という記述によりマタイ 16:3 の空の暗さが強調され、さらに C. L. W. Grimm, *Lexicon Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. quarta (Lipsiae, 1903), s.v. στυγνάζω では「憂鬱である、憂鬱になる」('tristis sum; contristor') の語義のもと「比喩的に、雲で覆われた空について」('metaph. de coelo nubibus tecto') として (26) が挙げられている。このように (26) の στυγνάζειν は陰鬱な空あるいは曇天について用いられていると見なされる。
- 58) *Seneca*, LCL 457, pp. 50–52. (60) は *OLD*, s.v. *tristis* 6b に挙げられている例である。
- 59) *Seneca: Moral Essays*, vol. 1, with an English trans. by J. W. Basore, LCL 214 (Cambridge, MA, 1928), p. 32.
- 60) *Pliny: Natural History, Preface and Books 1–2*, with an English trans. by H. Rackham, LCL 330, rev. and repr. (Cambridge, MA, 1949), p. 178. (62) は *OLD*, s.v.

- tristitia* 4 に挙げられている例である。
- 61) C. G. Bretschneider, *Lexicon Manuale Graeco-Latinum in Libros Novi Testamenti*, ed. tertia (Lipsiae, 1840), s.v. *στυγνάζω* では「憂鬱である」(‘*tristis sum*’) の語義のもと「比喩的に空について、曇った」(‘*tropice de coelo: nubilo*’) と記された (26) に続けて、(62) が (50)(57) と並んで挙げられており、*tristitia* が陰鬱な曇天について用いられることが示されている。
- 62) 本稿における生没年は R. Gryson, *Répertoire Général des Auteurs Ecclésiastiques Latins de l’Antiquité et du Haut Moyen Âge*, 2 vol. (Freiburg im Breisgau, 2007) または A. Blaise, *Dictionnaire Latin-Français des Auteurs du Moyen-Âge* (Turnholti, 1975) による。
- 63) D. Hurst & M. Adriaen, *Commentariorum in Matheum Libri IV, S. Hieronymi Presbyteri Opera*, pars 1, 7, CCSL 77 (Turnholti, 1969), pp. 136–37.
- 64) E. Dekkers et I. Fraipont, *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos I–L*, CCSL 38 (Turnholti, 1956), p. 490.
- 65) *OLD*, s.v. *tristis* 7 には「(自然の力などについて) 苛酷な、厳しい、荒々しい」(‘(of natural forces, etc.) Harsh, grim, savage’) の語義が、*OLD*, s.v. *tristitia* 5 には「(自然の状態の) 苛酷さ、厳しさ」(‘Harshness, severity (of natural conditions)’) の語義が挙げられている。
- 66) *Livy: History of Rome, Books V–VII*, with an English trans. by B. O. Foster, LCL 172 (Cambridge, MA, 1924), p. 46. (63)(66)(67) は *OLD*, s.v. *tristis* 7 に挙げられている例である。
- 67) *Seneca: Moral Essays*, vol. 3, with an English trans. by J. W. Basore, LCL 310 (Cambridge, MA, 1935), p. 250. (64)(65) は *OLD*, s.v. *tristitia* 5 に挙げられている例である。
- 68) *Pliny*, LCL 371, p. 304.
- 69) *Virgil: Aeneid VII–XII*, . . . with an English trans. by H. R. Fairclough, rev. by G. P. Goold, LCL 64, rev. ed. (Cambridge, MA, 2000), p. 56.
- 70) *Martial: Epigrams*, with an English trans. by D. R. S. Bailey, vol. 2, LCL 95 (Cambridge, MA, 1993), p. 260.
- 71) *Ovid: Heroides*, . . . with an English trans. by G. Showerman, rev. by G. P. Goold, LCL 41, 2nd ed. (Cambridge, MA, 1977), p. 254. (68)~(70) は *OLD*, s.v. *tristis* 7 に挙げられている例である。
- 72) *Martial*, LCL 95 (1993), pp. 86–88.
- 73) *Lucretius: De Rerum Natura*, with an English trans. by W. H. D. Rouse, rev. by M. F. Smith, LCL 181, repr. with revisions (Cambridge, MA, 1992), p. 494.
- 74) A. Mutzenbecher, *Sancti Aurelii Augustini Quaestiones Evangeliorum*, . . . CCSL 44B (Turnholti, 1980), pp. 18–19.

- 75) B. Paulus, *Pascasii Radberti Expositio in Matheo Libri XII (V–VIII)*, CCCM 56A (Turnholti, 1984), p. 792.
- 76) *Valerius Maximus: Memorable Doings and Sayings*, ed. and trans. by D. R. S. Bailey, LCL 492 (Cambridge, MA, 2000), p. 360. (71)~(73) は *OLD*, s.v. *nubilus* 1 の「(空などについて) 雲に覆われた、曇った」(‘(of the sky, etc.) Covered in cloud, cloudy, overcast’) に挙げられている例である。
- 77) *Seneca: Natural Questions, Books I–III*, with an English trans. by T. H. Corcoran, LCL 450 (Cambridge, MA, 1971), p. 22.
- 78) *Pliny*, LCL 370, p. 458.

On the Old English Equivalent of *tristis* in Mt 16:3

Satoru ISHIHARA

The *tristis* ‘gloomy, sombre’ in *et mane hodie tempestas rutilat enim triste caelum* (Mt 16:3) ‘And in the morning, [ye say,] To day [there will be] a storm, for the gloomy sky hath a reddish glow’ is rendered by *unwederlicce* ‘tempestuously’ in the Old English version: . . . *to-dæg hyt byþ hreoh weder þeos lyft scinð unwederlice* (Mt (WSCp) 16.3) ‘. . . To-day it will be rough weather; this sky shineth tempestuously’.

Latin *tristis* can be used of something dark-coloured, e.g. *vi tristia nubila pello* (OV. met. 6, 690) ‘by force I drive away gloomy clouds’, which is cited in the *Oxford Latin Dictionary* (OLD), s.v. *tristis* 6b (of shade, dark-coloured things, etc.) gloomy, sombre. And the *triste caelum* in Mt 16:3 derives from the στουρνάζων ὁ οὐρανός ‘the gloomy sky’ in the Greek original. Furthermore, *tristis* construed with *caelum* can be used of a gloomy, i.e. cloudy sky, e.g. *dicimus nivalem diem, cum altum frigus et triste caelum est* (SEN. nat. 4, 4, 3) ‘we call it a snowy day when the coldness is severe and the sky gloomy’, which the OLD also cites s.v. *tristis* 6b. It is to be said, therefore, that the *tristis* in Mt 16:3 is used in the sense ‘gloomy, sombre’, which sense is not reflected by the Old English *unwederlice*.

On the other hand, *tristis* can also be used of natural forces, etc. in the sense ‘harsh, grim, savage’, as shown in the OLD, s.v. *tristis* 7. And when it is used of foul weather, *tristis* can also be grasped in the sense ‘tempestuous, stormy, rough’, e.g. *quem per freta tristia tutum aurea lanigero vellere vexit ovis* (OV. epist. 17, 143) ‘[Phrixus] whom the golden sheep with its woolly fleece carried over the stormy seas safely’. In Mt 16:3, moreover, a reddish *triste caelum* in the morning is regarded as a sign of an impending storm.

Thus we can conclude that the *unwederlice* in Mt (WSCp) 16.3 reflects the sense ‘tempestuous, stormy, rough’ of *tristis*, which in Mt 16:3 is to be taken in the sense ‘gloomy, sombre’, used of an overcast sky.